



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1991
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

教導職と 真理と自由

7 私たちは諸学問の正当な自律性を尊ぶべきだと確信しています。しかし、信仰によって啓発された理性の働きを使ってキリスト者が神と世界と人についての基本的真理を知ったなら、自らの知的努力は本当の人間の発展という豊かな実を結ぶことが確信できます。信仰は知識追求の自由を規制するものではなく、自由を最大限保証するものです。このことは再び私たちに、真理に仕え、真理を求める自由とは何か、その真の意義に注目せよと促します。

「私のことを守ればあなたたちはまことに私の弟子である。またあなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由な者とするだろう。」(ヨハネ8・31・32) 主の言葉は真理のもつ解放する力を宣言しています。キリストこそが真理そのものであることに気づくと、この言葉の深い意味がもっとわかりやすくなります。

人間についての真理を自らのうちに有するのはキリストです。キリストこそ神の最高の啓示なのです。真理と自由の間にある深い関連性は、あらゆる種類の知識に影響を及ぼします。同じように、信仰と人間の知識の間には絆が存在し、真理は自由を規制しません。反対に自由は真理に向かいます。さらに信仰の真理は人知を規制しません。というより、むしろ人知がキリスト教信仰への道を切り開き、キリスト教信仰へ人知を導きます。理性による研究は自らの原理と独自の分野を持ち、それぞれ違う分野で自立したものですから、信仰は理性を使って続けられる研究に解決を示すものではありません。しかしそれにも拘わらず、信仰は理性を助けて人類と社会の最高善を全うするため役に立ちます。カトリック大学が知的分野で真の自由を促進させていくなら、社会全

体の善に向けてこの上ない貢献をすることになります。自然科学の特質の影響下にある今日の文化は、人間の超越的な面を認めない限り不完全なものとなります。それゆえ、実験による検証のみが唯一正当であると主張するような考え方は、決して個人や社会を正当に扱うことができません。

あらゆる研究の成果は、人類とその起源、運命、尊厳に関する基本的真理と一致して初めて最大限に利用できるのです。こういうわけで大学は本来、人類への奉仕を心に真理をより深く追究できるよう、絶対的かつ超越的感覚を以前にもまして受け入れる必要があります。

2 神学の知識についてよく考えてみると心はずく信仰に向かいます。信仰は神学全体の欠くことのできない基礎であり、根本的性格を宿すものだからです。信仰は神学の出発点であり、神学が絶えず言及していくところです。カントベリー

の聖アンセルムスは神学研究について有名な定義「知識を求める信仰」を残してくれています。神学は信仰を源泉とします。神学は、信仰を理

今日私たちがその「功德と栄光」を「唯一の祭日で(日本語のミサ文には訳されていない)祝う聖人たちは、至福八端の教えを一生の指針とした人々でした。希望は裏切られないことを確信し、神の御言葉とその約束を信じました。諸聖人たちは、贖いの秘義を通して人類に与えられた神の賜のすべてを福音書の至福八端が表していると理解していたのです。生ける神の御子は、至福八端の教えを通して、私たちの和解を告げてくださいました。御父の永遠の愛が真に実現したのは、まさに御子において、御子においてのみであつたからです。

「さいわいなるかな。」これは私たちが一生の指針とする教えであり、生涯においてキリストの十字架を担い、キリストの十字架を生きていくこの世のすべての人、一人ひとりに御自身が近づいてきてくださっていることの印です。聖人たちは貧しさと苦しみのなかに、柔和と慈しみのなかに、義への飢えと心の清さのなかに、キリストを見ることのできたのです。

解したいという信者の願望から生れるのです。信仰が教えるものは、人間の研究結果から生れたものではなく神の啓示からきたものです。信仰は、哲学のように完成されるべきものとして人間に伝えられて来たものではありません。むしろ神がキリストの花嫁に

ある意味でイエズスの御生涯のままな局面を示すと見え、色々な状況から聖人たちは教訓を学びました。至福八端の教えが主の弟子になりたいと望む者すべてに重要であることを確信したのです。

すべての亡くなった信者を記念する明日(十一月二日)を考えても、同じ思いが心に浮かんでいきます。血縁や友情や感謝で結ばれていて、先にこの世を去った人々を愛のうちに追悼しましょう。永遠の生命に入っても地上で結ばれていた絆は切れることはなく、むしろ神との交わりにおいて称揚します。亡くなった方々の徳と模範を思い起し、彼らのために祈りましょう。

いまは特に、病氣、戦争、高速道路や職場での事故で生涯を閉じた方々を思い起しましょう。

至福八端を日々宣言する祈り、「お告げの祈り」を捧げましょう。信じながら「さいわいなる人」と呼ばれた御母、諸聖人の元后である御母が私たちに寄り添ってくださいますように。(90・11・1)

苦しみの中に キリストを見よう

れた真理は一度だけ教会に委ねられ、それはキリストにおいて完成を見ました。信仰の「遺産」委ねられたもの(信仰の遺産)は、この世に教会が存続する限り、さらに詳しく説明され、理解を深めていくことができます。

信仰の内容をますます深く理解していくという仕事は教会のメンバー各自に課せられています。しかし、「書物、あるいは口伝による神の言葉、権威をもって解釈する役目は、キリストの名によって権威を行使する教会の生きた教導職だけに任せられている」(第二バチカン公会議「神の啓示に関する教義憲章」10)

しかし、教導職は神の言葉の上にあるものではなく、むしろ真理の確かな賜(カリスマ)でこれに奉仕するものである。(同8参照) この真理の確かな賜は、不可謬性のカリスマが含まれており、ローマ教皇と公式の荘厳な教義決定だけでなく、通常の普遍的な教導職においても働くものです。(『教会憲章』25参照) 通常の教導職は、教会の不可謬性の通常の表現なのです。

3 しかし、神学における正当な多様性を妨げることにはなりません。公会議の直後、パウロ六は「意見の適度な多様性は、信仰の一致や教導職の規準と教えへの忠実と両立しうる」(一九六一・一〇・一)と述べました。多様性の範囲は教会の教導職の教え、および信仰の一致によって決ってきます。しかしその範囲内で、神学上の多様性は一定し

た共通の基本概念を持つべきです。全ての哲学が、人間の理性と世界、神について首尾一貫した確かな知識を与えてくれるわけではありません。ところでこの種の知識は、神学にとってもどうしても必要なものです。神学的多様性の限界を理解するには、それを信仰の一致という点と合わせて考える必要があります。信仰の一致は啓示による真理にのみ依存しているからです。教会の教導職の不可謬性の保証を受けていない教えに関しても、意志と理性の敬虔な従順を示さなければならぬのです。(『教会憲章』25参照)

4 時の流れにつれて、いわゆる動きが大勢の信者の道徳生活(倫理生活)にいかにも有害な影響を及ぼしてきたかは、いよいよ明らかになってきています。昨年ロサンゼルスに集まった司教方に、私は「カトリック者の中には教会の倫理(道徳)に関する教えに対して選択的態度を取る傾向が目立ってきている」と申しました。(一九八七・九・一六) あ

る人々は自分たちのこの方法を正当化するため良心の自由を訴えます。この際、正しいか否かを「自由に」決めるのは良心でないことをはっきりさせる必要があります。J・H・ニューマンの簡明な表現を用いると良心とは「道徳真理を見抜く」道具であるということです。良心は道徳真理を見抜きます。良心が道徳を作り出すではありません。(『現代世界憲章』16、パウロ六世の一般謁見一九六九・二・十二参照)

(89・10・15)

現代社会の

挑戦を受けて

* 教皇様による新回勅の要約

◎ 今年、『レールム・ノヴァルム』(『新レールム』)が発表されました。

(…) 教会は、現代の挑戦から逃れるためではなく、今日、人々の間で続けるべき活動のための新しい活力と信頼を手に入れるために過去を振り返ります。そしてそれを、確たる価値と、教会内で絶えず続く聖霊の働きについての黙想を基盤にして実行します。教会が現在直面している問題は、レオ13世の時代の問題とは大いに異なりますが、私は前任者と同じ精神で問題に対処します。レオ13世は、当時の希望と期待に応えることによって神の霊に従いました。私も現在の希望と期待に関して同じことをするつもりです。

◎ 一つの出来事が、困難な時代に生きていた私たちに支配しているようです。それは、ヨーロッパと世界の歴史の周期に結びつくものです。

『レールム・ノヴァルム』がほとんど預言的に鋭く指摘した理由のために、マルクス主義体制は失敗しました。広範に広がり、人間の良心から宗教を根こそぎにするかと思われたこのイデオロギーとその経済力の失敗のうちに、教会は社会的・政治的範囲を越えた神の摂理の介入を見ています。しかし、このたびの

多くの民族と卓越した教会と個々の人々の解放を、不適切な満足感や根拠のない勝利主義にしてはなりません。マルクス主義はある程度克服されましたが、今だにさまざまな地域で極度の貧困は続いており、人口の大部分が基本的な権利と最低の必需品にも事欠く始末です。豊かな国の人々においては、物質面では満たされながらも、人生の意義・生きることの意義を体験できない状態であることに気づきます。疎外感や人間性の喪失に陥り、生産と消費の機構の中で歯車に成り果てたと感じ、神の似姿として創られた人格の尊厳を見つづけることができなくなっています。

マルクス主義は終りを告げましたが、それが食い物にしていた諸問題、不正義と人間の苦しみは今だに続いています。マルクス主義体制には満足な回答を与えられず、問題そのものは急を要するにも拘わらず、今も解決されていません。

今度の新しい回勅で、教会は全人類にこの問題を投げかけるだけでなく、満足のいく解決策を呈示します。社会正義、労働者の結束、人格の尊厳に関する問題の再確認、ということ。すなわち貧困と搾取に屈せず(…)、人間の超越的な面は決して放棄しないということです。

◎ 教会の社会教説は、個人が生産手段を私有する権利を認めます。教会はこの権利を、起り得る圧迫に対する自由の擁護と考えてきました。さらに、財産が多くの人の手に分割されると、各々が自らの必要を満たすために他人の協力を仰がねばならず、なくてはならぬ社会的な交換も、一人の自由意志がもう一人の自由意志と一致する契約によって規制されなければなりません。超官僚的で中央集権的な統制経済に対して、社会的なインスピレーションを得た自由経済には、前提として、相互に自由な主体が明確な責任を負い、協働者に対する義務を忠実に果たし、常に共通善を考慮するという態度が必要となります。従って、自由市場とそれの中の企業活動の倫理的価値、また自由売買によって消費者のニーズとそれに見合う適切な資源の出会いを用意する技量の倫理的価値を認めるのは正しいことです。この見地からレオ13世は集団所有権に反する理由として、共同体に提供すべき奉仕という関係の中での個人のイニシアティブを認めました。

◎ しかし、カトリック教会は今も昔も常に、市場を社会生活の至上の規範、模範であるとする考えに反対してきました。市場に入っているか否か、財産がありそれを売ることができると否か、必需品を買う手段があるか否かと別々に、神の似姿とその尊厳によって、人格を有する人間に固有なものがありません。この固有な何かは決して無視されてはならぬものです。それは、人間人格にとって唯一ふさわしい愛の社会

説教・講話・書簡等の抄訳

的な表れである尊重と連帯を要求するものです。自然的あるいは社会的な障害があるために、他の物と同じように必要でありながらも、市場に出回らないものがあります。

障害が大きい場合など、直接の援助をしたり、市場への流入を可能にする道を拓いて、できるならば生産と消費の世界に導き入れることによつて、これらの必要に応じるよう、国単位、あるいは国際的な働きかけがどうしても必要となります。

経済的自由は人間の自由の一部であつて、自由の他の面と切り離すことはできません。経済的自由は本當に人間的な共同体を形成するため、人間全体を完成させるのに役立つなければならぬのです。

● 言うまでもなく、個人の所有権と共に、世界の資源の普遍的な目的を主張しなければなりません。資源の所有者は常にその資源の目的に注意を傾けると同時に、資源は自らの自由を保証する一方、他人の自由を擁護発展させるのにも役立つことを忘れてはなりません。資源を補完的かつ本質に一致した役目から外してしまつと、それらがなぜ自らに委ねられたか、という目的に反して、共通善に役立つたぬ物になってしまいます。自由経済は確たる法的政治的な機構の中に組み入れられない限り、また何よりも倫理的宗教的良心に支えられ生かされなければ、人間人格にとってよりふさわしい生活条件のために役立つたり、応じたりすることができません。

理想的であると同時に現実的なこの考えは、人間性の根源に根ざした

ものです。「みずからを純粹に与えてはじめて、完全に自分自身を見いだせる」のです。『現代世界意章』24) 人はユニークで繰り返しのきぬ存在であり、見分けのつかぬ大衆に吸収されることはできません。個人的な利益を越え、多くの絆を通して人々とのつながりをもって初めて、自己の目的を達することができるとです。こうして、家族が誕生し社会が生じたのです。

仕事はその本質から、自立と人々との共働を促進します。人は他人とつながりを持ちようになります。このつながり、あるいは関係は競争と圧迫になることがあります。同時に、

祈りの生活の源

「聖霊」シリーズ ⑥

1 内的生活で最も大切なのは祈りです。霊的指導者はこれを確信しているのです。内的生活を祈りの生活と表現します。キリストにおいてそうであったように、この生活を編み出されるのは聖霊です。「イエズスは聖霊によって喜びに身をふるわせながらこう言われた。『天地の主なる父よ、あなたを賛美します。』」(ルカ10・21) これは「聖霊において」歓喜するイエズスからあふれる賛美と感謝の祈りでした。

「荒れ、祈るためしばしば一人になる間、祈るためしばしば一人になる連帯する共同体の一員として協力関係を打ち立てることもなります。さらに人間は自分だけのために働くのではなく、他人のため、家族のため、共同体のため、国・人類のためにも働きます。それが仕事の役割です。自由で実りある自己譲渡は、仕事にもあらわれるものです。教会の社会教説は、私有財産と地球資源の普遍的な目的とを確認することに よつて、経済活動を人間の召しだしという崇高で広い枠の中に入れていくだけです。

● 歴史を振り返ると一致と理解と連帯という特徴を持ち、より良く、より一層正義になつた社会を打ち立てる試みが沢山あつたことだけ。

とがわかります。これらの多くの試みは失敗に終り、他のものは人格に反する方に向かつていきました。人間の本性は社会的存在そのものですが、時に分裂・不正・憎しみを も引き起すようです。しかし、すべての人の父である神は、絶えず脅威となるこれらの困難に打ち克ち、恩寵によつて人間の心と精神を変えるために、御子イエズス・キリストをこの世にお遣わしになりました。

愛する兄弟姉妹の皆さん。より正義にかなない、より一層人間にふさわしい社会を建設するために政治、経済、文化のレベルで必死に努力しなければなりません。しかし、これだけで十分とは言えませんが、

2 ホゼアの書には記されています。イエズスの生涯と同様、私たちの生活においても聖霊は祈りの霊です。パウロは、前に引用したガラツシア人への書簡の中で見事に述べています。「あなたたちが神の子である証拠は、『アッバ、父よ』と叫ぶみ子の霊を、神が私たちの心に遣わされたことである」と。(4・6) 何らかの仕方、聖霊が御子の祈りを私たちの心に移され、その叫びを御子が御父に届けてください。このように祈りにおいて、私たちが「養子とされたこと」、キリストにおいて、キリストによつて、子とされたことが表明されます。(ローマ8・15参照) 祈りとは、信仰のうち「私たちが子供であり」、「神の世継であり」、「キリストと共に世継である」という信仰の真理を告白することなのです。聖霊は、「私たち

せん。決定的に責任をもって関わり合うためには、人間の心の中、良心の内奥での決心が必要です。こうして初めて、人間は真に深く積極的にならざるを得ないようになります。これこそ、社会を変え、改善するためにどうしても必要な前提なのです。

3 教会の始めから、キリストに臨んだときにもその信仰を表しました。最初の殉教者であり、「聖霊に満たされた」人であるステファノの祈りはよく知られています。ステファノは石殺しの刑を受けている間、ちょうど十字架にかけられたイエズスが刑死について言われたように、「主よ、この罪を彼らに負わせたもうな」と大声で叫び、キリストと一致していることを証しました。そしてなお祈り続け、「神の右に」立たれるキリストの栄光を見て、「主イエズスよ、私の霊をお受けください」と願いました。(使行7・55〜60) この祈り

不変の教え

は、殉教者ステファノにおける聖霊の働きの実りだったのです。

キリストへの信仰を告白したその他の人々の殉教録にも、ステファノの祈りに表れた内的霊感を見る事ができます。殉教録には、福音や使徒たちの書簡を通して形成され、教会の自覚となった、キリスト者の自覚が表れています。

4

キリスト教の祈りの作者は聖霊ですが、聖パウロが教えるように、「心は熱しても肉体は弱いもの」であるから、誘惑に遭ったときには「目を覚まして祈れ」(マテオ26・41)というキリストの勧めを思い起させるのも聖霊です。エフェソ人への書簡の中でこのキリストの勧めが励ましとあってごだましています。

「すべての祈りと願いをもって心のうちでいつも祈れ。絶えず目を覚まして、忍耐強く祈れ。福音の奥義を恐れなく告げようとして話す時、適当な言葉が下されますように。」(エフェソ6・18、19) 誘惑を退け、人間の弱さの餌食にならず、受けた使命に正面から取り組むために祈らなければならぬことをパウロは知っていました。パウロは自分に与えられた使命、つまりキリストと福音を全世界に、とくに異教の地において証しすることをいつも心に留めていました。ときには劇的にそれに気づくこともありましたが、「霊は私

のものを受け、それをあなたたちに知らせる」(ヨハネ16・14)と、イエズスが真理の霊について語っておられるように、パウロは、自ら行うこと、語ることは、真理の霊の働きであることを知っていました。福音の

宣教を通して「キリストに光栄を帰す」ために聖霊は「キリストのもの」をお使いになりました。それゆえ、キリストとその霊のつながりのなかに、御父との一致の秘義の中に入ることによってのみ、同じ使命を遂行することができるとです。そして、この一致に至る道は、聖霊が私たちの中に注がれる祈りです。

5

深い洞察力を示す言葉で、パウロはローマ人への書簡に、「霊も私たちを弱さから助ける。私たちが何をどういうふう祈ってよいかを知らぬが、霊は筆舌に尽くしがたいうめきをもって、私たちのために取り次いでくださる」(8・26)と記しています。「切なるあこがれをもって神の子らの現われを待ち」

「腐敗の奴隷から解放されて、(…)自由にあずかれる」ことを希望し、「今まで嘆きつつ陣痛の苦しみにあっている」(8・19、21、22) 全被造界の内奥から出る同じようなうめきを使徒は聞いたのです。このような歴史的、霊的な背景の中で、聖霊の働きが続いています。「心を探るお方は霊の意向を知りたもう。すなわち、霊は神のみ旨に従って聖徒たちのために取り次がれる」(8・27) これこそ祈りの核心です。聖霊は祈りをお勧めになるだけでなく、私たちの中で祈ってくださるのです。

6

三位一体の各ペルソナ間の関係を見事に表す祈りの源に聖霊はおられます。賛美と感謝の祈りを通して、御父は栄光を受け、御父と共に御子と聖霊も栄光を受けられます。聖霊降臨の日、使徒たちはこの賛美と感謝の祈りを唱えました。

その時、彼らは「神の偉大な業」(使行2・11)を宣言したのです。百夫長コルネリオの場合も同様でした。ペトロが説教していると、そこにいた人々は「聖霊の賜」を受け、神を賛美しました。(同10・45、47) パウロは初代教会の共同の遺産となつたこの最初のキリスト信者の体験を通して、コロサイ人への書簡で、祈り続けよと勧められています。「キリストのみ言葉をあなたたちの豊かにすまわせ」(3・16)、祈りにとどまり、心の底から、恩寵によって詩の歌と賛美の歌と霊の歌をもって神をこほげ」(同)そして、「あなたが

たちが言葉と行いをもってすることすべて」において、この祈りの生活を続けよと要求しています。「キリストによって、父なる神に感謝しつつ、主イエズスのみ名によってすべてを行なえ」(3・17) 同じような勧めがエフェソ人への書簡でも示されています。「霊に満たされよ。ともに詩篇と賛美をとなえ、心を挙げて主に向かって歌い、そして賛美せよ。主イエズス・キリストのみ名によって、すべてのことについて、絶えず父なる神に感謝せよ」(5・18、20)と。

こうして私たちはパウロの教えと勧めに従って、三位一体の神への祈りに戻ります。聖霊がこの祈りを勧め、心の中にそれを形成して下さることに気づきます。聖人や神秘家、キリスト教の各時代に発展した霊性の潮流や各派の祈りの生活は、初代共同体の体験でした。教会の典礼も同じ線上にあります。たとえば、「主の偉大な栄光のゆえに、主に

感謝し奉る」と歌う栄光の賛美などに見事に表されています。「テ・デウム(感謝頌)」では、神を讃え、主に「主に感謝を捧げましよう」と唱え、「まことに尊く大切なつとめ」と続けます。祈る教会に合せてこう繰り返すことはまことに美しいことです。各詩篇の終りに栄唱を唱えるのも本当にすばらしいことです。「父と子と聖霊に栄えあらんことを」。

私たちの祈りの中で、私たちのために祈ってくださる聖霊の働きが中心で、三位一体の神を賛美する言葉が心中に湧いてきます。続いてそれは、個人的な願い、共同体全体の願いがこもった賛美の歌声となつてほとばしり出します。神を愛する魂の祈りは自然に言葉となり、歌となります。それは最初のキリスト教共同体以来、教会ですと続いて来ました。聖アウグスティヌスは「聖アンブロジウスによってミラノの教会に歌が取り入れられた」(『告白録』9、c.7: PL 32, 770 参照)ことを伝えていています。そして「歌が甘美に響

き、感動に動かされ」(同9、c.6: PL 32, 769 参照)涙を流したことを回想しています。楽器が「感情を高揚させる」(聖トマス・アクィナス『詩篇詳解』322)とき、音(音楽)も神を讃えるのに大きな役割を果たすのです。「美しい旋律によって心が神へ向かうようかきたてられる」(『神学大全』II-II, q. 92, a. 2: 『告白録』10, c. 22: PL 32, 800 参照)したがって、教会の典礼で歌われる歌や演奏される音楽の価値を尊重するべきです。聖アウグスティヌスが『告白録』で述べていることを、私

7

「私たちが祈ってくださる聖霊の働きが中心で、三位一体の神を賛美する言葉が心中に湧いてきます。続いてそれは、個人的な願い、共同体全体の願いがこもった賛美の歌声となつてほとばしり出します。神を愛する魂の祈りは自然に言葉となり、歌となります。それは最初のキリスト教共同体以来、教会ですと続いて来ました。聖アウグスティヌスは「聖アンブロジウスによってミラノの教会に歌が取り入れられた」(『告白録』9、c.7: PL 32, 770 参照)ことを伝えていています。そして「歌が甘美に響

き、感動に動かされ」(同9、c.6: PL 32, 769 参照)涙を流したことを回想しています。楽器が「感情を高揚させる」(聖トマス・アクィナス『詩篇詳解』322)とき、音(音楽)も神を讃えるのに大きな役割を果たすのです。「美しい旋律によって心が神へ向かうようかきたてられる」(『神学大全』II-II, q. 92, a. 2: 『告白録』10, c. 22: PL 32, 800 参照)したがって、教会の典礼で歌われる歌や演奏される音楽の価値を尊重するべきです。聖アウグスティヌスが『告白録』で述べていることを、私

「私たちが祈ってくださる聖霊の働きが中心で、三位一体の神を賛美する言葉が心中に湧いてきます。続いてそれは、個人的な願い、共同体全体の願いがこもった賛美の歌声となつてほとばしり出します。神を愛する魂の祈りは自然に言葉となり、歌となります。それは最初のキリスト教共同体以来、教会ですと続いて来ました。聖アウグスティヌスは「聖アンブロジウスによってミラノの教会に歌が取り入れられた」(『告白録』9、c.7: PL 32, 770 参照)ことを伝えていています。そして「歌が甘美に響

き、感動に動かされ」(同9、c.6: PL 32, 769 参照)涙を流したことを回想しています。楽器が「感情を高揚させる」(聖トマス・アクィナス『詩篇詳解』322)とき、音(音楽)も神を讃えるのに大きな役割を果たすのです。「美しい旋律によって心が神へ向かうようかきたてられる」(『神学大全』II-II, q. 92, a. 2: 『告白録』10, c. 22: PL 32, 800 参照)したがって、教会の典礼で歌われる歌や演奏される音楽の価値を尊重するべきです。聖アウグスティヌスが『告白録』で述べていることを、私

「教皇様の声」 年間購読者募集中!

日曜日ごとの「お告げの祈り」や水曜日ごとの一般謁見の時を始め、教皇様はあらゆる機会をとらえて教えを伝えておられます。本紙はヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま、わかり易い日本語に訳して伝える月刊紙です。

- 年間購読料 1部900円+送料(1~19部) 600円を郵便振替にてお送りください。(神戸3-72393 精道教育促進協会) 本紙を毎月ご自宅まで郵送でお届けします。
- 教会で2部以上まとめてお申し込みになると送料が無料です。教会名・ご担当者名・部数を明記の上、お申込み下さい。

財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
Tel. 0797-31-3452 Fax 0797-31-3448

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393